

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12320

研究課題名（和文）ユーラシア現代史のなかのある白系ロシア人夫妻の軌跡 民間家族資料活用の試み

研究課題名（英文）Following the Tracks of a White Russian Family in Eurasian Modern History: A Case Study of Effective Utilization of a Private Family Archive

研究代表者

帯谷 知可 (Obiya, Chika)

京都大学・東南アジア地域研究研究所・教授

研究者番号：30233612

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、帝政ロシア、満州、日本、ソヴィエト・ウズベキスタンという稀有な移動を経験した白系ロシア人ミチューリン夫妻が残した家族アーカイブをカタログ化・データベース化し、彼らの移住と帰還をユーラシア現代史の文脈において考察することを目的とした。夫妻の足跡を確認しつつ、当該アーカイブ資料を精査し、231件のリスト化を実現した。成果物として帯谷知可/L.コザエヴァ編『ある白系ロシア人家族の軌跡』（CIRAS Discussion Paper No. 15, 2022）、日露2言語によるカタログ・データである帯谷知可/L.コザエヴァ編『「ミチューリン家アーカイブ」カタログ』（2024）を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、(1)ウズベキスタンの民間に保管されてきた家族アーカイブのカタログ化・データベース化によって、そのコンテンツの保存と国際的な共有を可能にし、(2)そのことによって白系ロシア人研究、在日白系ロシア人研究、日本におけるロシア語教育史および東京外国語大学史の研究、露・日・中央アジア交流史に新たな資料を提供してその充実に貢献し、(3)白系ロシア人のソヴィエト・ロシアではなくソヴィエト中央アジアへの帰還および中央アジアにおけるロシア系帰還者とそのコミュニティという研究課題を開拓するものである。

研究成果の概要（英文）：This project aimed to catalogue the private archive of a white Russian family, A. Michurin and his wife, Nina, who experienced a quite unique emigration from Imperial Russia: to Manchuria, then to Japan, and to Soviet Uzbekistan. It also aimed to consider their emigration and repatriation in the context of modern Eurasian history. We succeeded in uncovering the background and tracks of their emigration to a certain extent, examined the contents of the archive closely, and got the list of 231 items of the archive. As a result of the project, we published Obiya, C. and L. Kodzaeva (eds.), Following the Tracks of a White Russian Family: Michurin Archive in Tashkent (Uzbekistan), (CIRAS Discussion Paper No. 115, 2022), and compiled Obiya, C. and L. Kodzaeva (eds.), The Michurins Archive: Catalogue (2024) as a set of bilingual (Japanese-Russian) catalogue data.

研究分野：中央アジア地域研究

キーワード：白系ロシア人 ウズベキスタン 日本 ロシア ソ連 東京外国語学校 アレクサンドル・ミチューリン ニーナ・ミチューリナ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

本研究を構想したきっかけは、2018年にタシュケント（ウズベキスタン）在住の旧知の中央アジア美術史研究者 L.コザエヴァ氏より、かつて1940年代から50年代にかけて東京の大学でロシア語を教えていた白系ロシア人アキサンドル・ミチューリンの家族アーカイヴ（以下、ミチューリン・アーカイヴ）を個人として保管しており、一度見てもらえないかと声をかけられたことにあった。コザエヴァ氏がミチューリン家のアーカイヴを保管することになったいきさつとは、アレクサンドルの妻ニーナ・ミチューリナが夫の死後、日本から、生まれ故郷のロシアではなく、ソヴィエト体制下のウズベキスタンへ「帰還」したためであり、その地でコザエヴァ氏とニーナは隣人同士で親子のような親交を結び、ニーナは晩年ウズベキスタンからロシアへ居を移す際にコザエヴァ氏にこのアーカイヴを託したというものである。現物を見せてもらったところ、そこにはロシア語・日本語・中国語・英語など多言語にわたる多様な文書・資料が含まれ、帝政ロシアから満洲（ハルビン）、そして日本（東京）へというミチューリンの足跡や、日本におけるミチューリンの活動と関心をうかがい知ることのできるものであることがわかった。加えて、妻ニーナの日本からさらにソヴィエト・ウズベキスタンへの移動は、白系ロシア人の移動のパターンとしては極めて稀有な、興味深いものであるように思われた。このアーカイヴは現状としては個人所蔵のものであり、万が一の散逸に備えると同時に、日本において白系ロシア人研究等に携わる研究者にも参照可能なものとなるよう、アーカイヴに所収されている文書・資料に関する情報を整理した上で、コンテンツを保存・共有することにも学術的な意義があると考えた。

### 2. 研究の目的

上記のような背景のもと、本研究はウズベキスタンの民間において保管されてきたこのミチューリン・アーカイヴにつき、その保管者である L.コザエヴァ氏の協力を得て、以下の3点を研究の目的とした。

(1) 地域研究希少資料の現地との協働による保存・共有・利用という観点からこのアーカイヴをカタログ化・データベース化すること。

(2) 帝政ロシアから満洲を経て日本へ移動し、その後ソヴィエト・ウズベキスタンへ帰還し、さらにソヴィエト・ロシアへと移動したこの家族の移住とソ連帰還の歴史的経験を日本とユーラシアをつなぐ現代史の文脈において明らかにすること。

(3) 白系ロシア人の日本からソ連への帰還とその後に関する研究分野において、生まれ故郷ではないソ連の非ロシア地域への帰還という新たな観点を付加することによって、白系ロシア人研究の深化に、またニーナ・ミチューリナを軸とするタシュケントのロシア人・ロシア語話者コミュニティのありように迫ることによって中央アジア・ロシア人研究の深化に貢献すること。

### 3. 研究の方法

(1) ミチューリン・アーカイヴの全容を把握し、そのコンテンツを保存するために、同アーカイヴ所収資料を1点ずつデジタル・カメラで撮影し、その画像と紐づけながら日露2言語併記で所収資料リストを作成する。

(2) 上記(1)のリスト作成作業と並行して、同アーカイヴ所収資料の解説とその内容の精査を行う。

(3) 在日白系ロシア人関連の先行研究を渉猟しミチューリン夫妻に関する情報を収集する。

(4) 日本およびウズベキスタンにおいて、文書館等における資料調査と関係者へのインタビュー調査を実施してミチューリン夫妻に関する新たな知見を得、それらに基づいて白系ロシア人研究におけるミチューリン夫妻の位置づけを検討し、彼らの移動の背景と経緯、各地での生活と交流関係などを明らかにする。

(5) 上記(2)～(4)を総合することにより、ミチューリン夫妻の移住とソ連帰還の歴史的経験を日本とユーラシアをつなぐ現代史の文脈において描出する。アレクサンドル・ミチューリンについては、満洲から日本への移動の経緯、当時の東京外国語学校の事情、第二次世界大戦下において敵国人と見なされ収監された背景と処遇、日本滞在中の教育・学術活動、ソ連国籍取得の背景などに着目した。ニーナ・ミチューリナについては在日ロシア人研究においてたいへん著名なロシア語教師・画家ヴァルヴァーラ・ブブノヴァとの生涯にわたる交流、ソ連国籍取得の背景、ソヴィエト・ウズベキスタンへの「帰還」の経緯、タシュケントにおける生活と彼女を取り巻いたロシア人・ロシア語話者コミュニティのありようなどに着目した。

#### 4. 研究成果

(1) ミチューリン・アーカイヴの概要： 当初 100 点程度と見積もっていたが、リスト作成の結果、所収資料は 231 点を数えた。文書、パスポート、手紙、絵葉書、電報、通知・案内、パンフ・チラシ、封筒、書籍、辞書、教科書、新聞、新聞切抜、雑誌、論文、冊子、草稿、原稿、リスト、メモ、写真、地図、図版、その他に分類した。これ以外に、コザエヴァ氏は上述のヴァルヴァーラ・ブブノヴァが日本で制作し、ニーナ・ミチューリナに贈った版画 2 点も保管していることが明らかになった。

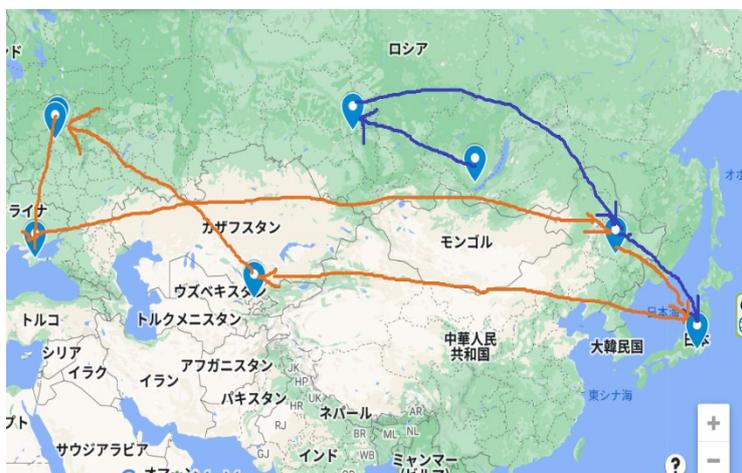
(2) アレクサンドル・ミチューリンについて： ミチューリン・アーカイヴ所収資料の解読などによって、アレクサンドル・ミチューリンはイルクーツクに生まれ、トムスク大学法学部に学び、裁判官となったこと、第一次世界大戦にロシア帝国の軍人として参加し、ロシア革命後にハルビンに逃れ同地の白系ロシア人社会に身を置いたこと、ハルビンでは 20 年以上ロシア語教師を務め、中国語文書では「米秋林」という漢字姓が用いられていたこと、日本語能力検定試験 3 級の試験に合格していたこと、東京外国語学校の招聘により来日の運びとなったことなどが明らかとなった。日本滞在中には、ロシア語教育以外にも、日露交渉史、シベリア民族誌、日本考古学などに関心を有していたようである。

国内資料調査によって、ミチューリン招聘当時の東京外国語学校では、第二次世界大戦前夜であったせいか、ソ連国籍人がロシア語ネイティブの教師として雇用された前例はなく、ミチューリン以前にはセルビア系の教師が長らく教鞭を執っていたことが明らかになった。ミチューリンは「元露国人」であり、来日時には無国籍であった。

また、国内でのフィールドワークにより、東京都多磨霊園外国人区においてアレクサンドル・ミチューリンの墓所を探し当て、死亡年月日を確認することができた。

(3) ニーナ・ミチューリナについて： ウズベキスタンにおけるインタビュー調査およびコザエヴァ氏執筆の回想的エッセイ（書き下ろし、未刊行）から、ニーナの経歴の概要が判明し、ニーナのウズベキスタンへの移動は、夫アレクサンドル・ミチューリンの前妻との間に生まれた娘が当時タシュケント在住であったことも要因であるらしいこと、ニーナ以外にもヨーロッパなどからウズベキスタンへ「帰還」したロシア人が一定数存在しており、その中には著名な学者や芸術家・文化人が含まれていたこと、そうした人々の間でコミュニティが形成され、相互に助け合っていたこと、ニーナはタシュケントで（日本語？）通訳として仕事をしたが、やがて失明したこと、最晩年に自らの実家の系列の親戚を頼ってモスクワへ移住し、そこで亡くなったことなどが明らかになった。

(4) 研究成果物として、コザエヴァ氏の上述エッセイの日本語訳を含む、帯谷知可／リュドミラ・コザエヴァ編『ある白系ロシア人家族の軌跡—ウズベキスタン共和国タシュケントに残るミチューリン家アーカイヴ』（CIRAS Discussion Paper No. 115, 京都大学東南アジア地域研究研究所, 2022 年）を刊行し、また、日露 2 言語併記によるカタログ・データとして帯谷知可／リュドミラ・コザエヴァ編『「ミチューリン家アーカイヴ」カタログ』（2024 年）を作成した。後者は近刊予定の冊子体カタログおよび検討中のデータベースの基盤となるものである。



【ミチューリン夫妻の移動の軌跡】

（青線：A. ミチューリン、赤線：N. ミチューリナ）



【A. ミチューリンの墓】

（多磨霊園）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 帯谷知可	4. 巻 104(1)
2. 論文標題 ロシア帝国からムスリム女性の解放を訴える O.S.レベヂェヴァとA.アガエフのイスラーム的男女平等論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 113-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

〔図書〕 計2件

1. 著者名 帯谷知可、リュドミラ・コザエヴァ編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学東南アジア地域研究研究所	5. 総ページ数 125
3. 書名 ある白系ロシア人家族の軌跡 ウズベキスタン共和国タシュケントに残るミチューリン家アーカイヴ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------